

- 「ラオスの自給的水田農村の出生力低下」……………高橋眞一（新潟産業大）
「ラオス中部農村からタイへの国際人口移動」……………中川聡史（神戸大）
「ネパール山岳地域住民の外出行動－ポーターから海外出稼ぎへ」……………溝口常俊（名古屋大）
（山内昌和記）

地理情報システム（GIS）学会2010年度研究発表大会

地理情報システム学会2010年度研究発表大会は、2010年10月23日（土）・24日（日）、立命館大学衣笠キャンパス（京都府京都市）にて開催された。今回で19回目を迎えた本大会は、GISの普及発展とともに規模が大きくなり、多岐にわたる報告・ポスターセッションが行われた。丸2日に及ぶ多数の報告のなかから、とくに地域人口分析と関連の深いものを以下に記す。

- ・「戦前の六大都市における小地域人口統計データベースの構築」……………桐村喬（立命館大学）
- ・「国勢調査基本単位別集計データを用いた狭小商圏の人口推計
－町丁・字等別集計データとの比較－」……………草野邦明（助統計情報研究開発センター）
- ・「市町村通勤データを用いた都市圏設定」……………福本潤也（東北大学）・北野翔太
- ・「明治・大正・昭和初期における琵琶湖淀川流域の人口分布変化」
……………山下亜紀郎（酪農学園大学）
- ・「がん早期診断の地理的格差：大阪府がん登録資料の小地域空間解析」
……………中谷友樹（立命館大学）・井岡亜希子・津熊秀明
- ・「日本の地方都市におけるフードデザートマップの作成とその比較」
……………駒木伸比古（首都大学東京）
- ・「首都圏における不動産の高齢化に関する空間分析」……………川向肇（兵庫県立大学）・岩場貴司
（小池司朗記）

2010年度人文地理学会大会

2010年度人文地理学会大会が、2010年11月20日～22日（22日は巡検のみ）、奈良教育大学（奈良県奈良市）において開催された。60件の一般研究発表、および4件の特別研究発表が行われ、この他に同時開催された研究部会で4件の研究発表がなされた。人口関連分野についても多くの発表があった。以下、主なものについて発表タイトルを記す。

- 「近代移行期の天然痘による疾病災害研究の課題」……………川口洋（帝塚山大学）
「中山間地域のIターン者・Uターン者の実態－和歌山県新宮市の事例から－」
……………中村拓・今井藍子・寒川万里菜・平川隆啓（大阪市立大学）
「兵庫県農村地域におけるUターン・Iターン移動－多可町加美区の事例－」
……………中川聡史（神戸大学）
「2000年以降の京都府における市区町村人口の変動過程
－人口の自然増加と社会増加を用いた類型化による分析－」……………山神達也（立命館大学）
「明治末期以降の日本の六大都市における小地域人口統計」……………桐村喬（立命館大学）

「マニラ首都圏におけるスラムの女性住民の移動過程—国際労働移動との関連から—」

.....太田麻希子（日本学術振興会・研究員）
（山内昌和記）

ヨーロッパ人口学会2010年大会

標記の学術集会（European Population Conference 2010）が2010年9月1～4日の4日間にわたりオーストリアの首都ウィーンにおいて開催された。本大会はヨーロッパ人口学会（European Association for Population Studies: EAPS）がウィーン人口研究所（Vienna Institute of Demography: VID）と共同で開催したものである。欧州をはじめ、世界各地から多数の参加者があり、日本からも筆者を含め数名が参加した。

本大会のメイン・テーマは「人口と環境」（Population and Environment）であったが、そのためのプレナリー・セッションが設けられるわけでもなく、特に本テーマで盛り上がったという印象はなかった。従来同様「出生力」、「家族・世帯」、「セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス」、「国際・国内人口移動」、「健康・傷病・死亡」、「ライフコース」、「政策」など主要なテーマの下、多くの口頭発表セッションとポスターセッションが設けられ、活発な報告と討論がおこなわれた。出生力に関しては、近年の欧州諸国における出生率の反転上昇傾向に関心が注がれた。

筆者はポスターセッションで“The changing transition to adulthood in Japan: delay, diversification and increasing atypical cases”と題する報告をおこなった（本研究所の別府志海主任研究官との共同報告）。若者の就業や家族形成の現状と政策のあり方は先進諸国共通の課題であり、引き続き欧米の研究動向に注目したい。次回EPCは2012年にストックホルムで開催される予定である。
（佐藤龍三郎記）